

トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の 資源状況と資源回復に向けた提言

(独)水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所

基本情報

- 標識再捕調査の知見に基づいて、日本海、東シナ海、瀬戸内海を一つの資源として評価。
- 雄は2歳、雌は3歳で成熟する。
- 2012年は169万尾の人工種苗が放流された。



府県別漁獲状況(重量)

- 九州西岸～日本海～瀬戸内海の各府県で漁獲
- 様々な大きさのトラフグを多様な知事管理漁業により漁獲
- 重量換算と尾数換算では構成割合に大きな違い

平成24年漁獲量

(トン)

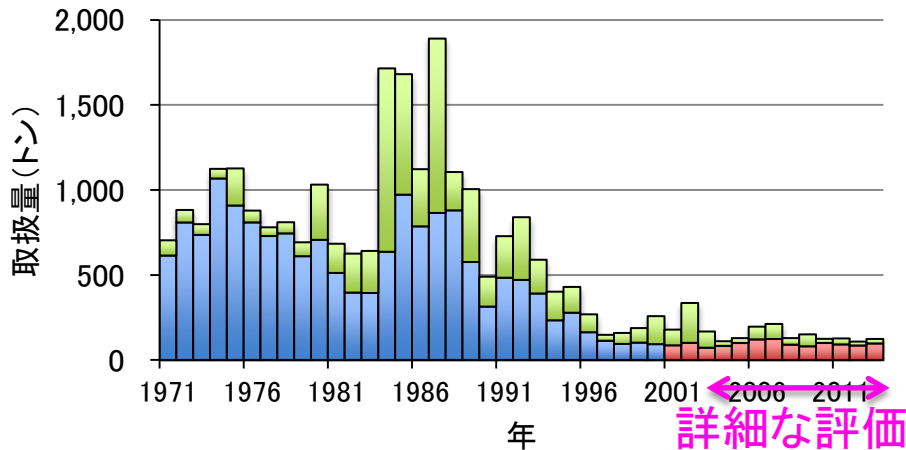
	石川	福井	京都	鳥取	島根	山口	福岡	佐賀	長崎	熊本	鹿児島	計
日本海・東シナ海	7	5	2	3	3	39	60	6	18	7	1	155

	宮崎	大分	愛媛	山口	広島	岡山	兵庫	香川	徳島	和歌山	計	合計
瀬戸内海	2	17	21	18	3	2	6	7	0.2	0	76	230

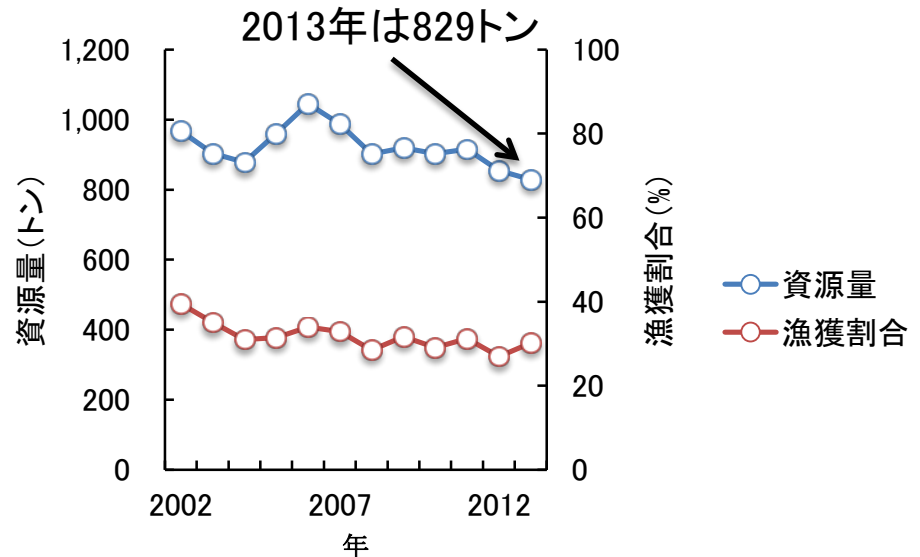
○資源評価票からの引用
・漁期年(4～3月)集計

トラフグ 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群 の資源状況

- 資源水準は低位、動向は減少。
- 人工種苗の放流、漁期規制、全長制限が実施されているが、資源量の回復の兆しはない。



- 瀬戸内海産(ただし、2005年からは三重県産等が含まれる)
- 瀬戸内海以外の外海
- 我が国周辺水域以外を含む

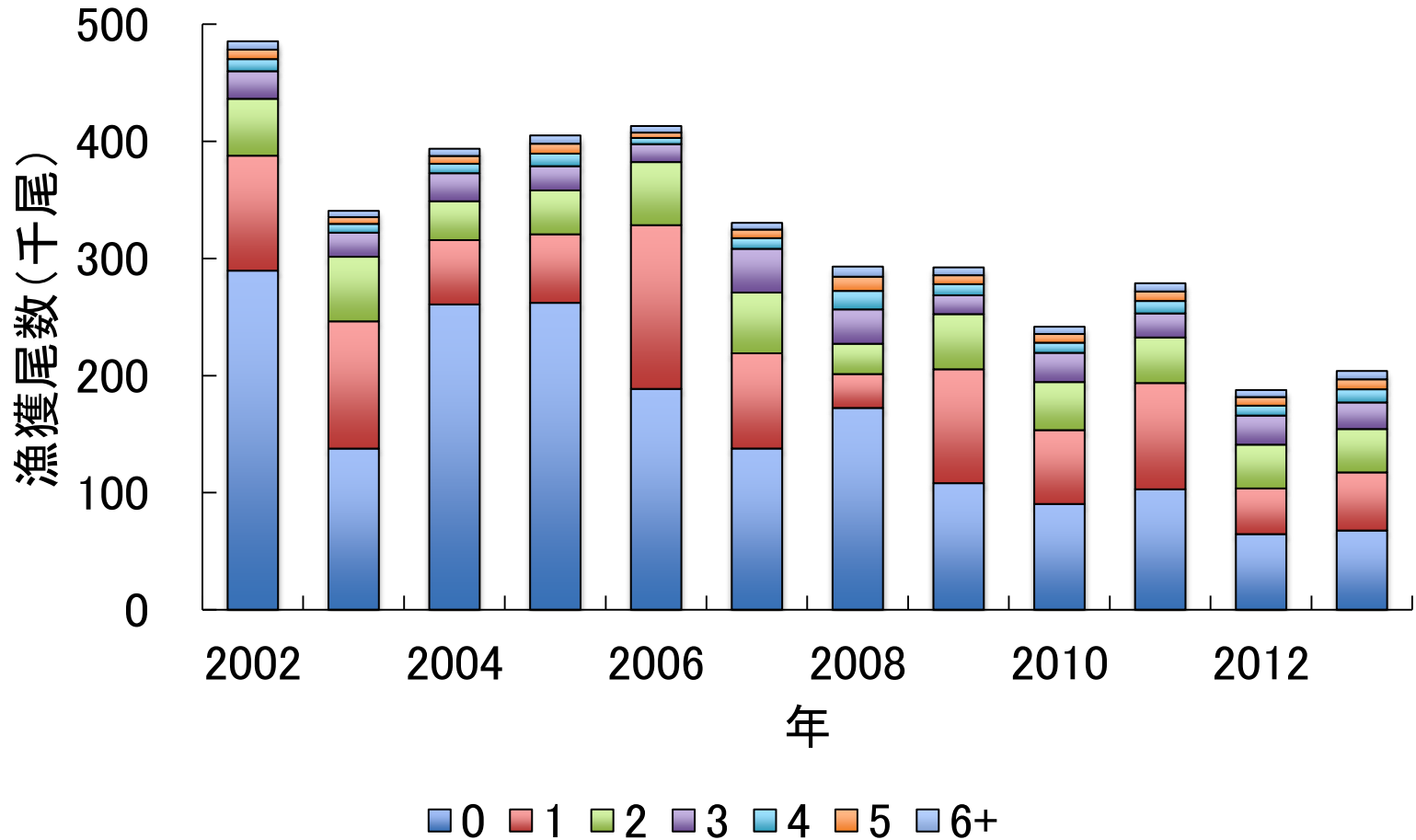


資源量の推移

下関唐戸魚市場のトラフグ取扱量の推移

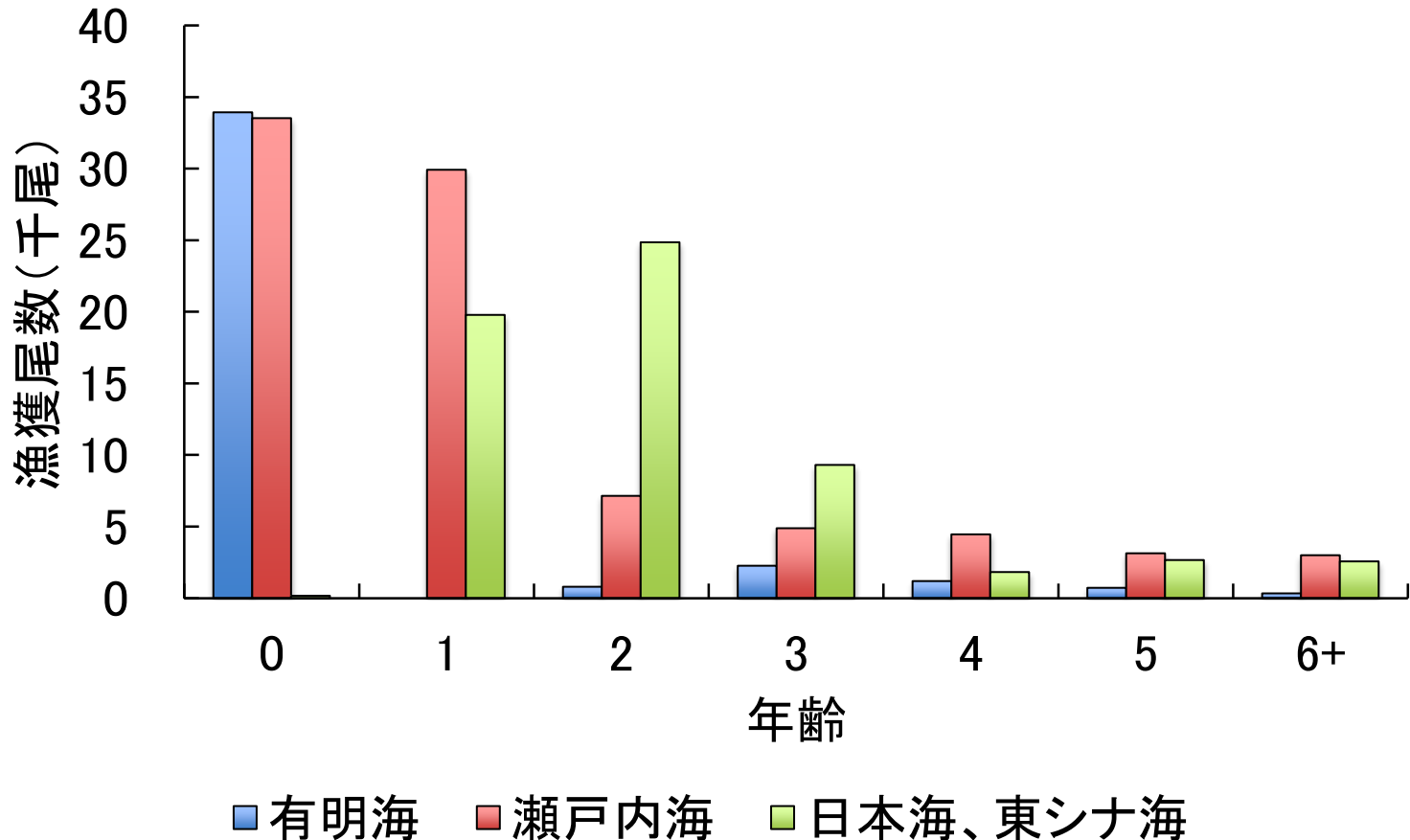
年齢別漁獲尾数の推移

漁獲の半分以上は0歳と1歳で占められており、未成魚に漁獲が偏っている。



海域別年齢別漁獲尾数(2013年)

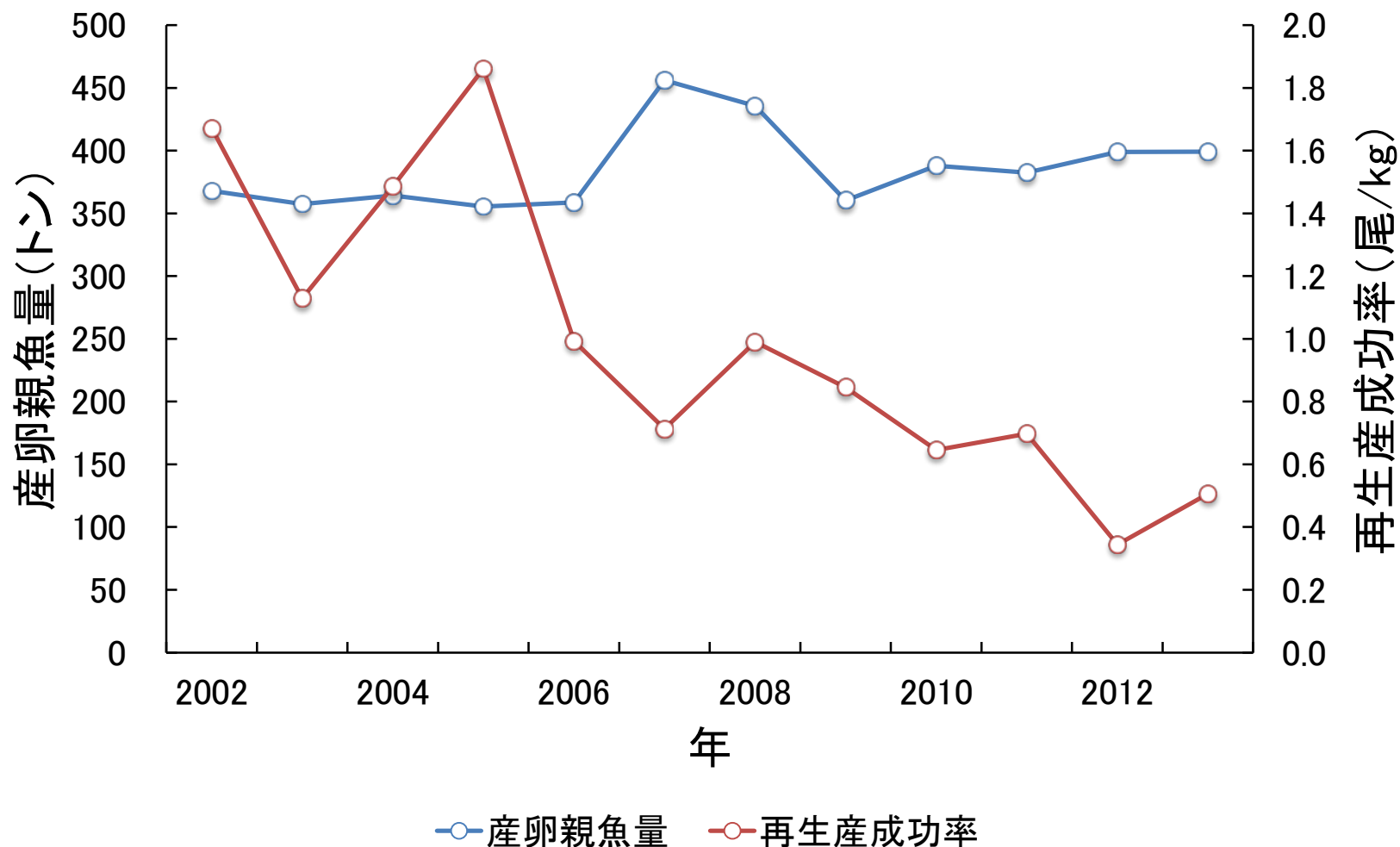
有明海では0歳が、瀬戸内海では0～1歳が、日本海、東シナ海では、1～2歳が漁獲の中心。



産卵親魚量と再生産成功率の推移

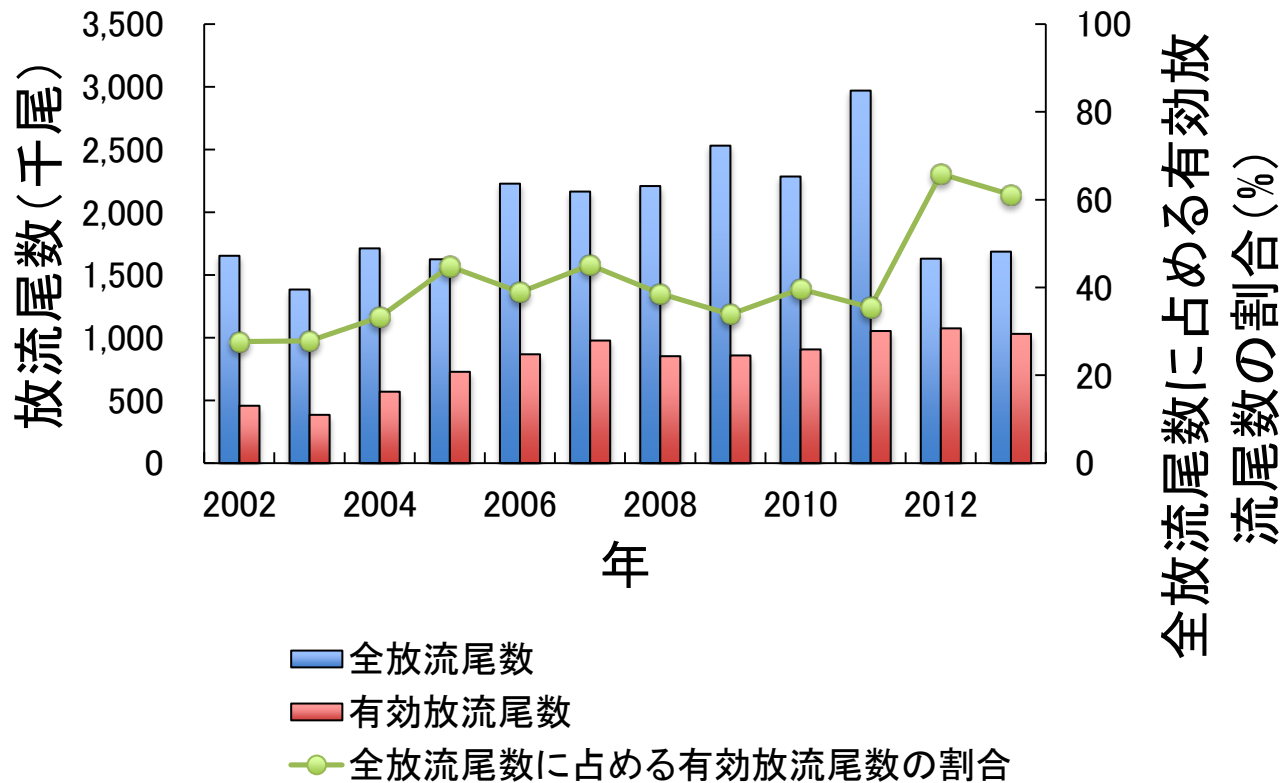
産卵親魚量は横ばいで推移。2006年以降、再生産成功率は減少傾向。

※再生産成功率: 1kgの産卵親魚当たりの天然0歳魚の尾数



放流尾数の推移

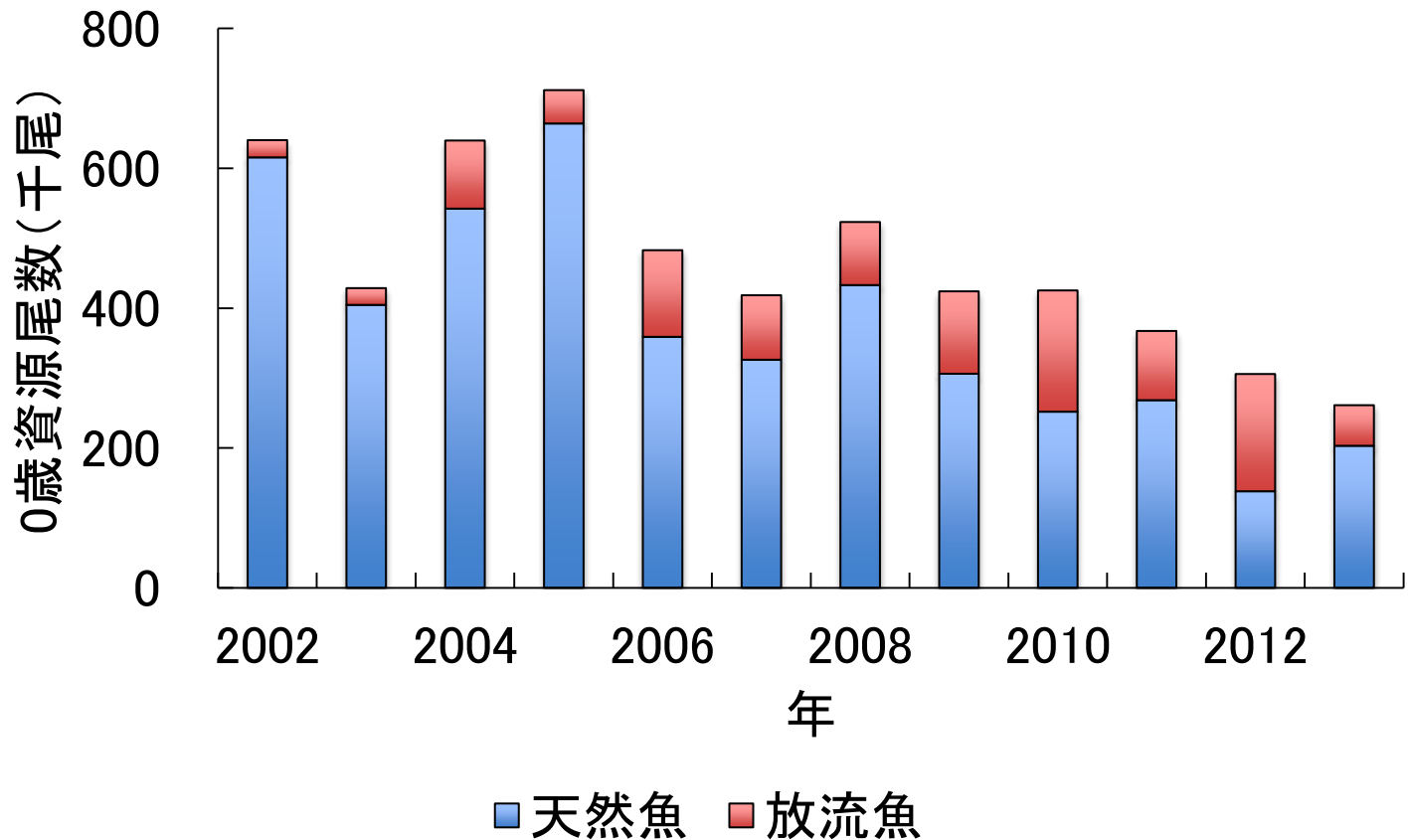
- 天然稚魚の成育場に全長7cm以上で尾びれの欠損のない人工種苗を放流しなければ、効果は期待できない。
- 近年、全放流尾数に占める有効放流尾数の割合は増加傾向。



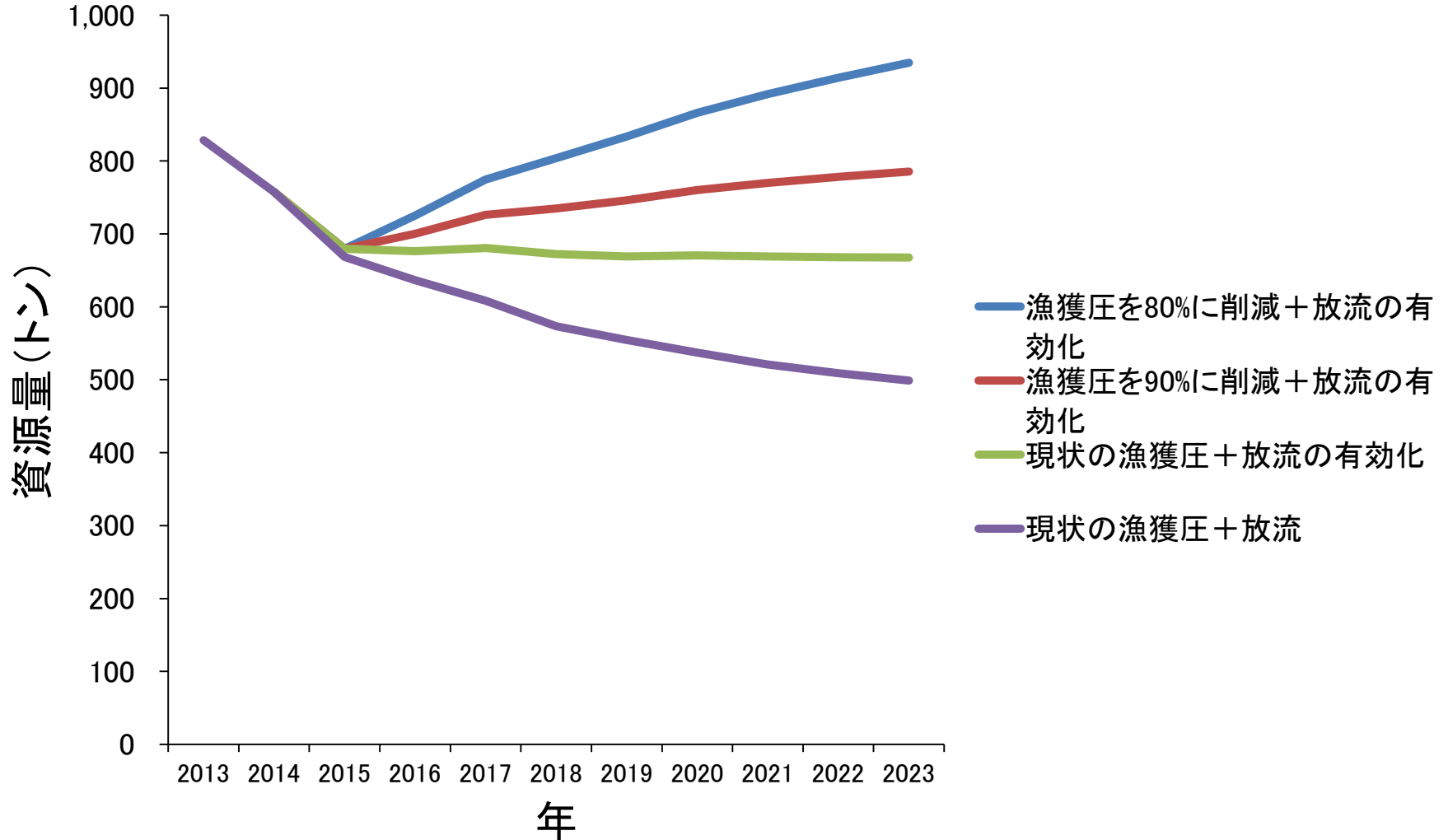
※有効放流尾数:放流場所、放流サイズ、尾びれ欠損の
度合で試算された有効な放流尾数

0歳魚資源尾数と0歳時点の放流魚の混入率の推移

0歳時点の混入率は増加傾向。



条件別の資源量予測の推移



※放流の有効化:天然稚魚の成育場に全長7cm以上で尾びれの欠損のない人工種苗を放流すること。

まとめー1

- ☆資源水準は低位、資源動向は減少で、現状の漁獲と放流が継続された場合、資源量は減少し続けると推定される。
- ☆資源の回復のためには、放流種苗を効果的に資源に添加することに加えて、更なる漁獲圧の削減を行うことによって急速な資源回復の実現が可能である。

まとめー2

- 天然魚の加入が低水準かつ減少傾向にあるにも関わらず未成魚に漁獲が偏っていることから、特に0～1歳魚の獲り控え(再放流含む)の取り組みを直ちに開始することが必要。
- それぞれの産卵場や成育場において漁獲実態や資源状況に応じた漁獲規制や保護を行うことが必要。
- 本種の成育場は沿岸の限られた海域であることから、種苗放流の実施に当たっては、環境収容力に注意を払うことが必要。
- 放流魚の高い混入率を考慮すると、集団構造や遺伝的多様性に配慮した種苗放流を行うことが重要。